

現地通信



アロール・ジャングスから

坪内良博

1 村への帰還

6月23日昼、バンコック、クアラ・ Lumpur を経て、再びアロール・ジャングスにやって来た。昨年来雇っているサアド夫妻が、前日から待っていたのに遅い遅いと言いながらとにかく大喜びで迎えてくれた。大掃除をしたらしく、部屋にはちり一つなく、わが家は極めてよく保たれていた。マラヤ大学留学生で休暇中留守番役をしていた前田成文氏が5月はじめに去ってからの一カ月余りのできごとを、大きな身ぶりで、ものすごく誇張して説明した後、米、石油、食用油、コーヒー、粉乳、砂糖、洗剤等がなくなったから早速買えという。たちまちのうちに大散財をすることになった。

2 アロール・ジャングス村

アロール・ジャングスは、東南アジア研究センターのマレーシア・インドネシア計画に基いて、マラヤ調査班班長だった故棚瀬襄爾博士と吉田光邦氏とが先発隊として、昨年6月、本隊より一カ月前にマラヤへ来

て、社会学的・人類学的調査のために選択したマレー半島北西部ケダ州の稲作地帯に位置する小さな田舎町である。この調査地については、既に棚瀬博士が、「東南アジア研究」2巻2号の現地便りで紹介されているし、同誌3巻1号には、「マラヤ北西部の稲作農村」と題して、経済的側面についての中間報告が、口羽・坪内・前田によってなされているので、ここではアロール・ジャングスのマラヤ班をとりまく、物的・人的環境について雑文をしたためることとする。

アロール・ジャングスは、ちゃんとマラヤの地図にも載っている地名であるが、さてどの範囲がアロール・ジャングスかというややこしくなる。このあたりのマレー人家屋は、水路に沿ったやしの林の中に建てられ、それらがモスクを中心として「村」(Kampong)を形成しているが、アロール・ジャングスは、それらの村の名前の一つではなく、パダン・ララン(Padang Lalang)とクバン・シム(Kubang Siam)という二つの村が接触するあたりに存在する小さな中国人の商店街を中心とした地域の地理的な名称に過ぎない。

(図1参照)70戸余りの中国人の商店や住宅は、マレー人社会の中の租界のような存在だが、町というには小さ過ぎて、行政的には大部分がパダン・ララン村に入る。われわれの調査範囲は、パダン・ララン村のマレー人(200余世帯)を中心として、それにこの中国人の街および隣接するクバン・シム村の一部を含んでいる。

3 村での生活

わが家は、アロール・ジャングスの入口に位置する小学校の真向いにあり、6畳位の仕切り4つからなるマレー式の高床家屋で、裏の家主から月30\$（約3,600円）で借りている。村のマレー人家屋のようにやしの林に囲まれてもおらず、中国人の家のように大きくて奥深くもなく、おまけにトタン屋根ときているから暑いこと甚だしい。この附近で最も暑い家だということで、特に暑い日にはマレー人の下男さえ逃げ出すほどである。

暑いといっても、日中、室内の温度はせいぜい32°Cでとまる。とは言え、この地方は現在雨期にあたって湿度が高く、たえず身体が汗ばんで気持ち悪い。雨は極めて男性的な降り方をして、はげしいときは家が本当にぐらぐらゆれる。去年は川があふれて、わが家のまわりは沼のようになり、50m離れた（棚瀬説による）便所へ通うのが大変だったが、今年はどうやら降雨量が少ないらしく、気候的条件は今のところ昨年よりもよい。

この雨を利用して田植えが始められ、毎夕、一列になって田植えから帰る女達の姿が窓からみられる。現在田植えはほぼ8割終ったところで昨年より少しはやいように思われる。田の荒おこしは男の仕事だが、田

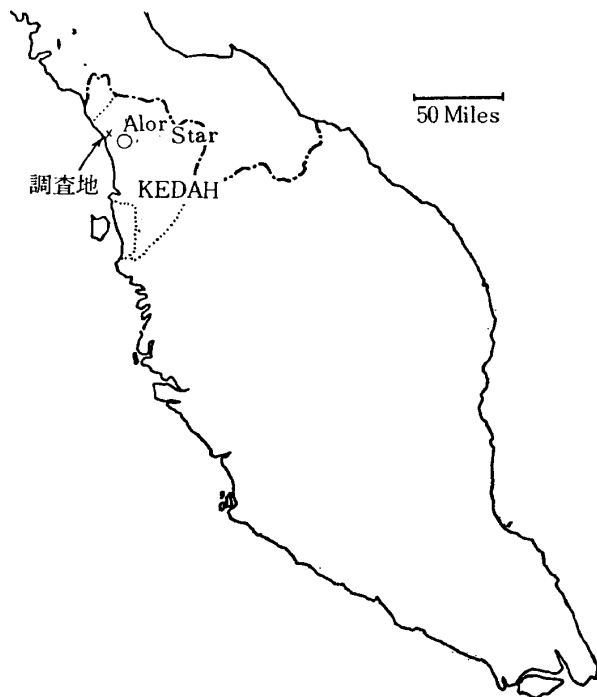


図1 調査地点 Padang Lalang 村

植えはこの村では完全に女の仕事である。クク・カンビン（山羊の爪）とよばれる木製の柄のついた金具の先に苗をはさんで植えていく。10人位の女のグループに男が一人か二人ついて苗運びをするが、女にまじって仕事をするのを他の男にみられるとはずかしいと言う。女が田植えをしている間、男はどこかにかくれて時間をつぶしている。

4 われわれの召使

わが家に下男夫婦がいることは既に述べた。一番身近にいるマレー人として彼等について少し詳しく紹介する。男はサアドといって62才、女はロキアといって46才である。二人とも再婚で、サアドは5回め、ロキアは3回めの結婚だが、今の結婚は9年間続いている。サアドは3人の妻と既に離婚したが、一人はまだ結婚したままなので、現在二人の妻を持っている。イスラムに従えば二人の妻を平等に扱わねばならない筈だが、ロキアの方が若いのと、収入源がこちらにあるのとで、殆んどの時間を当方で過している。一夫多妻といえ、われわれの通訳のハリムという中学生の父親も妻を二人持っているが、これは几帳面に二人の妻が住む二つの村を往復している。一般には殆んどの男は一人の妻しか持たない。ロキアは12才のとき結婚した最初の夫に離別、二番めの夫に死別してサアドと結婚した。二番めの夫との間に20才になる息子があるが、彼とサアドとの仲は余りよくない。

このように書くと、彼等は実に何度も結婚しているようであるが、当地には結婚回数8回、9回というような猛者もいるのでおどろくにはあたらない。

サアドは学校の雨水を貯えたタンクから水をかづいで来るのが主な仕事で、この水が料理と水あびに使われる。ロキアの仕事は、料理と洗濯と買物だ。このあたりでは男が買物に行く場合が多いので、昨年ここにはじめて来た頃は、毎日サアドに金を渡していたが、つまみぐいが余りにも激しいので、ついに買物の費用も給料もロキアに渡すようになった。彼女にとっても今がかせき時だから、サアド程ではないが買物の費用を少しずつこまかしている。せいぜい1日1\$（約120円）までだから、われわれは見ても見ぬふりをしているが、ロキアに会計の実権が移ってから、彼女がまたたく間に金の腕輪と首飾りを買ったのには驚いた。両方で200\$（約24,000円）位する品物で、わずかを差し

引くだけで売れるし、また質入れもできるから、この辺の女性にとっては最良の貯蓄法である。

彼等には月はじめに60\$（約7,200円）の給料を払う。官吏を除けば極めて低賃金のマラヤの田舎では、食事付で60\$の前払いというのはかなりよい条件である。

ロキアはこの中からサアドに小遣いを渡す。例えば、先月（7月）は10\$、今月（8月）は5\$を渡している。サアドは麻雀が好きでこの金を持って勝負にいき、またたく間に一文無しになって、ロキアにしかられながらしょんぼりしている。男性の権力が強いイスラム社会にはあるまじき光景である。

このようにうだつがあがらない状態にはあるが、サアドはなかなかのしゃれ者で、結婚式のおよばれや金曜日の礼拝（ときにはさぼることもあるが）には、上等の服を着て背中をしゃんとのばして出かけていく。若いときに、サアド・ストッキングという仇名をつけられたという。当時珍しい靴下をはいて歩いていたからだ。

ロキアには一つの大きな目的がある。それは家を新築することだ。せっせと貯めて、既に材木を143\$で買い入れた。総工費予算は、300\$（約36,000円）だが、現在のわが家よりも小さいがしっかりした家ができる筈である。

彼女の料理は、方法と材料とが共に限られているので実に単調である。三種類くらいの魚、骨と皮ばかりのにわとり、もやし、馬鈴薯、鶏卵、あひるの卵等がその限られた材料の大部分を構成し、これらを油でいためるか、カレー煮にするかが主な料理法で、昼と夕は全く同じ料理ができるから、1週間もするとかなり閉口する。それでも昨年にくらべると味つけなどがかなりうまくなっている。料理はまずいが、話は上手なので、わが家の台所にはたえず近所の若い娘や老婆が遊びに来ている。

夕方、電気が来て扇風機が廻り出すと、サアドとロキアは片っ端から窓をしめて鍵をかける。このあたりにはときどき強盗が出没す

るからだ。昨年8月には4人組が他の村からやって来るのを、アロール・ジャングスの警察が村人の通報で事前に知って、待ち伏せをして途中で捕えたという事件があったし、今年の6月にはとなり村で強盗があって、金持の村人が一人刺されて死んだ。われわれは防衛策として、銀行にいかないと換金できないと盛んに宣伝している。

5 われわれの調査

こちらに着いてから20日ばかりすると、日羽益生氏がやって来た。更に10日遅れて前田清茂氏が到着。わが家はこれで満員となり、ここで寝とまりしていたサアド夫婦は自分の家から通って来るようになった。続いて藤本勝次氏と梅田輝世さんがアロール・スターに来て、アロール・ジャングスのマレー班は最盛期をむかえた。

日羽氏は昨年約半年にわたって当地に滞在していたので、アロール・ジャングスでは顔が広く、われわれ日本人の代名詞のようになっている。郵便屋が「クチバノ」と声をかけても他の者の手紙しかないこともあるし、筆者などが一人で街を歩いていると、「クチバ」とよびかけられることがある。

前田清茂氏は、中国語が達者な天理大の先生で、アロール・ジャングスの中国人の調査をうけもっている。彼の到着以来、わが家には中国人の来客が急に多くなった。昨年から出入している金商（金製品を売る



写真1 水牛を使っての荒おこし。うしろに見えるのはわが家とマレー人国民学校。

店)の梅という青年の外に、精米所で働いている30過ぎの男——シャツの肩に喪章をつけているから、われわれは彼を「喪章」とよぶ——、中国人学校6年の洗濯屋の息子などが常連である。中国人との接触が多くなると、前田氏というチャンネルを通して、彼等のマレー人批判がいろいろと伝わって来る。いわく、「マレー人は怠け者だ」、「すぐに人の真似をして、借金をしてまで単車を買う」、「料理が下手なマレー人をなぜ雇っているか」、「マレー人の店は品物の並べ方がなっとらん」、「マレー人の墓はまるで恰好をなしていない



写真2 魚釣りは女だけがする。

い」、「マレー人は親が死んでもなかない」等々。言語も、宗教も、生活様式も全く異なる民族が、密接な経済的関係を通じて並存するマレーシアという国はなかなかむずかしい問題をもっている。その中国人も決して完全な一つの集団ではなく、福建人と広東人、金持と貧乏人というような互いに対立する側面をも有している。

関西大学教授の藤本氏はイスラムの研究家で、アラビア語が読めるので、アロール・ジャングスのマレー人から尊敬されている。立派な体格の持主で、昨年こ

の家に来たとき、薄い床がぬけたことがあり、「トアン・ジャトー」(落ちた旦那)という仇名もついており、サアドとロキアは、こと毎に、落ちた後の彼の注意深い歩き方を真似する。

紅一点の梅田さん(関西学院大学大学院)がわが家に通うようになってしばらくは、散歩にことかきりて、わが家をのぞきに來る人々が急増した。マレー人、中国人、男、女を問わずわが家の前をぞろぞろ歩いてのぞき見していく。イスラム社会では、われわれ男性が女性にインタビューするのが非常に難しく、この頃になってようやく近所の女の子と短い会話を交わせるようになった程度であるから、彼女の参加には大きな期待がかけられている。実際、到着して間もなく、彼女はわれわれでは到底みることができない女の子の割礼の場面に出くわしたし、村の産婆からマレー人が用いる堕胎薬を貰って來たりした。このおろし薬は一目みて明礬(みょうばん)であることが分った。

前田氏は毎日中国人地域へ、梅田さんはアロール・スターからバスで通って來てわが家の近くのマレー人の家へ、そして口羽氏と筆者は、昨年120\$ (約14,400円)を投じて購入したささやかな自家用の自転車に乗って、2マイルにわたってえんえんと続いているパダン・ララン村のどこかの家へと出かけて、調査は少しずつ進行してきた。

この通い馴れたパダン・ラランへの道は、ごく最近つくられたアロール・スターへ続く新道で、昨年は赤土の道だったのに、今年はほぼ完全に簡易舗装ができた。現状のバス道路は迂回して來るので、アロール・スターから9マイルの道のりだが、この新道を通ると、5マイルにまで短縮される。旧道ができる前は、小舟で川を伝って数時間かかってアロール・スターへ行くか、泥沼のようなところを歩いて行ったというから著しい変化だ。

便利にはなったけれども、移住と自然増によって人口も増えて來た。70年前には人家はきわめて少なく、ジャングルが多い土地だったというが、今では殆んどが水田と化してもはや開拓の余地もない。イスラムの相続法、あるいは子供に土地を均分するマレーの慣習法に従って、マレー農民の土地は次第に細分化されるし、土地のない農業労働者もかなり発生している。

中国人とても例外ではなく、アロール・ジャングスは既に満員で、アロール・スターへの通勤者が多く生

じて来た。

昨年は向いのマレー人国民学校からめったに歌声がきこえなかったが、今年は、金曜日のコーランばかりでなく、オルガンなしで歌うので少し調子が狂ってはいるけれども、斉唱がさかんに聞えるようになった。

アロール・ジャングスのテレビ所有者も、3人めが現われた。

マラヤにおける農村の変化は激しい。われわれの家が、マラヤ産の木材、スウェーデン製の合板、日本製のトタン板で成り立ち、その中ではマレーシア、日、米、英、独、仏、オランダ、オーストラリア、香港、中共等の製品で生活が営まれているように、都市から、外国から、物質的ばかりでなく精神的にもどっと新しいものが流れ込み、住民は何らかの形でそれに対処せねばならぬ。その変化の一場面で、われわれの調査は行なわれているのだ。

あと20口もすれば、藤本、前田(清)、梅田氏、更に口羽氏がここを去る。そして筆者も9月末にはアロール・ジャングスを離れ、マラヤ班は、プロト・マレーの集落で別行動をとっている前田成文氏

を残すのみとなる。目下、人々の関心は、われわれの家財道具の処理にむけられており、ベッドを買いたい、自転車を買いたいという希望が、下男夫婦を通してまい込んだりする。

調査は次第に終りに近づいてくる。こうして集め得た限られた資料から、この社会をどこまで分析して再構成することができるだろうか。ともかく最善を尽くすつもりである。

1965年8月8日

アロール・ジャングスにて

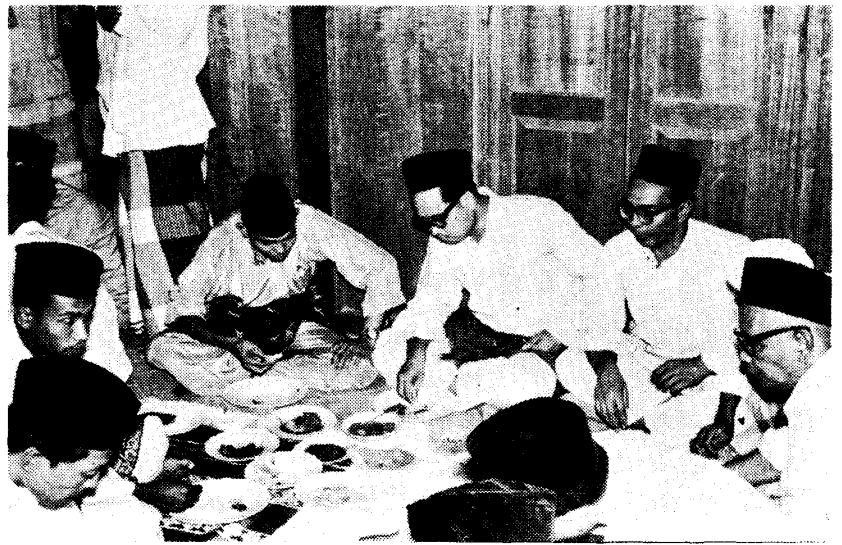


写真3 結納式に集まる人々。

タイ国水田の植物栄養学的調査

福井 捷朗

1 はじめに

今年度の調査期間は、今年の7月から翌年、1月末までの7ヶ月の予定であります。実際には、昨年一年間、バンコクの農業大学（カセツェート大学）ヘセンターの第一回留学生として滞在しておりました関係上、今回の調査研究の準備はすでにほぼ完了しており、一部は今年の5月はじめより着手することができました。

2 調査の概要

今年度の調査内容を最も忠実に表わすと思われる題は、一口にいうと「タイ国における代表的な水田土壌の窒素変遷の経時的調査」とでもいえるでしょう。以下、現在行なっていることを順に説明いたします。

まず、多かれ少なかれタイ国の水田を代表すると思われる水田土壌地帯4ヶ所を選び、各地にひとつずつと、さらにそのうちの1ヶ所では、普通の一期作水田と二期作水田との2ヶ所、結局、合計5ヶ所に実験用の圃場を選定いたしました。それらは以下の通りで



写真1 水牛を使つての耕起（タイ中部）

す。

- (1) 略号 BK : BANGKHEN RICE EXPERIMENTAL STATION バンケンというのはバンコクの空港とバンコク市とのほぼ中間にあたる場所にあり、農業大学や、農務省関係の試験研究機関のあるところ。この土壌は BANGKOK DARK HEAVY CLAY と従来、呼称されて来たものであり、タイ中央平野の水田地帯の一つのタイプを代表するものと考えました。
- (2) 略号 DC : DOUBLE CROPPING の略で(1)の試験場の北方約1キロにある農家の田んぼで、ここでは局部的ですが、毎年二期作を行なっている。一期作との比較という意味で加えました。今年は5月5日に移植、8月8日に稲刈（OFF SEASON）でした。OFF SEASON としては、やや遅すぎると思われます。
- (3) 略号 RS : RANGSIT RICE EXPERIMENTAL STATION バンコックから北へおよそ50kmほど行ったところにあります。酸性土壌地帯にあり、試験場内は移植栽培ですが、附近は直播が普通である地帯です。飛行機で日本から来ると、丁度この上空あたりを通りますが、この附近一帯はタイでも一番早くから規則正しい灌漑用水路が設けられ、稲作国タイの印象を強く受ける人が多いようです。試験場は幹線用水路沿いにあり、渡し舟を利用せねばなりません。
- (4) 略号 LB : LOPBURI の略で、バンコックから北へ約150kmの LOPBURI 県県庁所在地の同名の町の1kmほど南にあります。附近には奇怪なかっこうをした石灰岩の山があり、土壌も LOPBURIC LAY と呼ばれる石灰質土壌で、真黒の中性を示す土壌です。この土壌の占める面積はそれほど大きくはありませんが、他との比較の意味も含めて実験地のひとつに入れました。
- (5) 略号 KK : KHON KAEN の

略で、ここには稲作試験場があるのですが、あまり余裕がなく、しかも無施肥の田んぼがない



写真2 田植，正条植はしない（タイ東北部）

ので、試験場に隣接する農家の所有地を一年契約で借用することになりました。ここはバンコクからはるか500kmもはなれたタイ東北部で、住民はラオス系で、貧しいといわれている地帯です。村落調査に来ておられた当センターの水野浩一氏の部落もこの近くにあります。土壌は砂質で、極度の磷酸欠乏で、下層に岩塩層がある場合が多く、乾期には地表に析出する時もあります。pHは乾期の表土で6.0程度です。東北部は一般に貧しいということと、ラオス国境に近いことなどのためもあって、政府の政策の重点がここに置かれ、米穀局関係も特にこの地方の技術指導に力を入れている関係もあって、少し遠いのですが、実験の対策としました。バンコクからの道路はアメリカの援助によって出来た素晴らしいもので、京都、東京間の距離に匹敵するところを5～6時間で来てしまいます。

以上の5ヶ所のそれぞれには、5～7米四方の区画を一枚の田んぼの中央部に設け、それを実験の調査の対象とします。今年度はさしあたり、大部分のタイの水田がそうであるように無施肥栽培を従来通りの栽培法で行ない、このような自然条件下での植物養分の変遷を調べることにしました。

調査すべき項目は以下の通りであります。

〔A〕 現場において直ちに調査できるもの。

- (1) 土壌の各層の酸化還元電位。
- (2) 水素イオン濃度 (pH)
- (3) 植物の生育状況 (高さ、茎葉数、穂数)
- (4) 土壌、水、気温度
- (5) 水深
- (6) 水の浸透状況など

〔B〕 持ち帰った試料について分析すべき項目。

- (1) 土壌分析：原土アンモニア態及び硝酸態窒素含量

風乾土全窒素量

乾土満水アンモニア生成量

- (2) 植物分析：各部位の窒素含有量

- (3) 田面水分析：全窒素含有量

これらのうち、(2)の植物分析はこちらでは試料の調整だけにとどめ、帰国後分析する予定であります。

以上の項目以外についても、他の無機イオンについての土壌及び植物体の分析は帰国後すべて行なうことにしております。

どうしてもこちらで分析せねばならないものは、米穀局技術部の実験室の一室を借用して行なっておりますが、もっともこの米穀局技術部 (RICE DEPARTMENT, TECHNICAL DIVISION) というのは農業大学のキャンパス中にあり、留学当時からしょっちゅう往き来していたところである上、FAOのエキスパートとして米穀局に昨年来、勤務しておられる日本の農業技術研究所の高橋治助博士のひとかたならぬ世話で万事うまくいっております。実験室での器具、薬品類はもちろん、土壌採取用の特別の道具なども附置工場であつらえたりしてもらっております。

各実験地での調査は原則として2週間毎に行なっております。このようにして、それぞれの実験圃場における土壌、植物体、田面水中の窒素の分布を稲作シーズン全般を通して経時的に見ることが出来ますし、さらに土壌中の窒素については、その植物根にとっての可吸性によって形態別にその量を知ることが出来ます。

3 調査の意義

次の二つの点から見て興味あるものと思われます。

(1) 植物の生育が植物自身の各要素に対する栄養要求性と、土壌などの環境から供給される養分の量とのバランスの上に立っているということ。つまり、水稻の方としては、それぞれの品種の特性に従って、生育各時期によって養分要求性が変化し、また吸収された養分の植物体内における意義もそれに応じて変化して行くものであり、土壌や田面水から供給される養分量も、特に水田のような湛水処理を行うところではその年間変動が大きいと予想されます。ことにタイ国のような雨期、乾期の区別がかなりはっきりしている場合には、少なくとも窒素の供給量は興味ある変化を示すと思われます。今年度の調査項目によれば、主として後者、すなわち土壌の養分供給量の季節変化を追跡して行くことになります。

(2) 東南アジアの水田のほとんどが、無施肥栽培であり、その上、畑地農業に見られるような輪作形態もほとんど発達していないにもかかわらず、幾世紀にもわたり、日本の平均収量とは比ぶべくもないにせよ、とにかく一定の収量を毎年あげて来ている事実の原因は、養分の天然供給量と植物による吸収量とが平衡状

態にあるからだと言えます。この天然の窒素供給量の給源を完全に解明することは、はなはだ困難なことだと思われますが、まずその実態を詳細にわたり把握する必要があります。本調査の目的のひとつはここにあります。

これらの2点を目的とするにすれば、今年度の調査項目はきわめて不十分ではありますが、まず手はじめとして、もっとも基礎的な数字を着実に掴みたいという気持ちであります。

4 今後の見通し

まず、今年度と同じ調査を同一地点であと2回は繰返すことが必要であります。一年一回の実験を一年だけで終らせては信頼度のあるものとはいえません。それと同時に、前述の二点に沿って、間口の方も拡げて行きたいと思っております。すなわち、

- (1)に関しては：さらに精密な植物の吸収量、つまり植物の葉位分析、インド稲の植物栄養生理的特性についても手をのばしたいと思います。と同時に、もう一方の土壌の養分供給量についても、施用された肥料の湛水土壌中での行方を追跡していく方向へも調査範囲を拡げて行きたいと思っております。これは実際の施肥技術確立の上で参考になりうるもので、タイの技術者、研究者たちにとっても益するところがあると期待しています。
- (2)に関しては：天然的な養分供給力のうち最も問題となる窒素について、その固定能を持つ微生物の質的、量的探索をやはり経時的に追跡できればと思っております。

5 おわりに

調査地点は、タイ中央部と東北部に散ってはおりますが、2週間毎のサンプリング行をのぞけば、あとはバンコクの研究室で専ら分析にたずさわっている関係上、バンコク連絡事務所には、ほとんど毎口のように顔を出しております。

今年は雨の降りはじめは特に遅いということはないようですが、その後の雨量が十分でなく、各地で水不足が問題となっているようです。実験地のひとつであるKHONKAENでは局部的に降雨がなく、まだ田植もできない有様で、なかには村をすて他地方へ離散していく農民も出て来ているようです。

(1965年8月10日記)



写真3 稲刈、まだ水は引いていない(タイ中部)

コ ー ネ ル 大 学 か ら

小 林 一 三

1. は じ め に

日本をはなれてから一年以上の月日がたつ。昨年の6月20日わたくしは、京大東南アジア研究センターからの留学生として、アメリカへやってきた。最初の2ヶ月間は、American Economic Association 主催の Economics Institute という外国人留学生のためのオリエンテーション・コースに出席するため、コロラド州の University of Colorado に滞在した。9月以降は、ニューヨーク州の Cornell University にうつり、そこで1964年の秋学期と1965年の春学期をすごした。以下は、この一年間におけるわたくしの留学生生活のかんたんなレポートである。

2. Economics Institute

Economics Institute は、1958年に、American Economics Association が主催者となり、Ford Foundation の財政的援助のもとに発足したものである。アドミニストレーションは、Institute of International Education (I. I. E.) が受けもっている。

この機関の設立主旨は、外国の学生が、米国の大学院で学ぶために必要な、経済学および農業経済学にたいする専門的知識を準備するため、とされている。わたくしが出席したのは、その第7回目の講習会であった。プログラムの内容は、大別して、①経済学の基礎理論についての講義、②英語のトレーニング、③アメリカの大学制度、アメリカ経済学の紹介、④数学、⑤レクリエーション、その他であり、世界各国からあつまった約60人の学生は、大学の寄宿舎へ合宿して、これらのプログラムに参加した。学生の出身国はさまざまだったが、そのほとんどが、ラテン、アメリカ諸国、東南アジア諸国、アフリカ等、いわゆる低開発諸国から来ていた。日本からは、沖縄をふくめて、7人が参加していた。

①の経済学基礎理論は、前半は macroeconomics

後半は microeconomics で、Samuelson の “Economics” 程度の授業が、毎日おこなわれた。②の英語トレーニングについてはとくべつ書くまでもなく、英語をよりよく「読み、書き、話す」ためのレッスンである。①、②は1クラス10人位ずつのグループに分けて行なわれた。③は毎日1回、大きな教室で、講演形式で行なわれた。これには、ミシガン大の K. E. Boulding、エール大の N. W. Chamberlain、シカゴ大の H. G. Johnson、ヴェンデルビルトの A. M. Tang など、日本でも、よく知られた Professor たちがぞくぞくと顔をみせた。

Economics Institute でおこなわれた経済学の講義、講演の特徴は、それらがすべて、いわゆる近代経済学のものにかきられていたことであろう。批判の対象として引き合いに出されることはあっても、マルクス経済学の説明といったようなことはなされなかった。そして、授業中しばしば今までマルクス経済学を学んできた者とプロフェッサーとの間に、はげしい議論がひきおこされた。④の数学は、経済学の基礎的な用具となる部分についての講義がなされた。⑤のレクリエーションとしては、近くのロッキー山脈や、ゴースト・タウンへのバス旅行、フォークダンスなどがあった。

あつまった学生たちの言動には、やはり出身国の色彩がにじみでていたようである。ラテン・アメリカの学生は概して、よくしゃべり、よくさわいでいた。政情不安定な国からきたものほど、政治的な議論をよくしていたようである。東南アジアでは、タイ、インドネシアからそれぞれ5人以上きていたが、いろいろな意味で対照的だった。タイの連中は食堂などでグループをつくっても、もくもくと食事していることが多かった。インドネシアの学生たちはあつまると大変にぎやかであった。タイの連中は、あまり政治的な話を好まず、いわゆる世間話という感じの会話が多かった。それにひきかえ、インドネシアからの学生は、ナショナリズムむきだして、よく政治的な議論をしていた。かれらにとってスカルノは大きな存在らしく、「羊のようなアメリカ人」の筆者レーデラーが、スカルノの批判めいたことをいったために、インドネシアからの学生にかこまれてつるしあげられるというシーンがあったという。レクリエーション・プログラムのひとつとして、自分達の国をいろいろな角度から紹介するシ

ョーがあったが、それもインドネシアの学生がまっさきに買って出た。われわれ日本から来たものも、戦後日本における経済成長の分析や、さくらさくら、花の斉唱などをして好評だった。われわれは、沖縄から来た人も含めてやったのであるが、よく沖縄と日本との関係を外国の学生たちから聞かれた。日本人があんがい無関心でいるうちに、沖縄はどんどん一人歩きしはじめ、かえって外国人のほうが、その持つ重要性をするどく把握しているように感じられた。

3. コーネル大学、概要

コーネル大学は、1865年に創立された。だから今年



写真1 コーネルのキャンパス
(右手正面 Uris Library, 左手正面 Olin Library)

が創立100周年となる。100年目の誕生日を記念して、さまざまな行事がもよおされた。世界中のいろいろな大学からのお祝い状が図書館のちんれつだにかざられ、そのなかには、東大大河内教授、京大奥田教授両総長からのお祝い状もまじっていた。コーネルのもっとも大きな特徴は、private school と public school の共存ということにあるだろう。コーネルのキャンパスは、大へん美しいこととともにスロープがきついので有名であるが、Arts and Science を中心とする private school はスロープの下の方に位置し、Agriculture, Home Economics, Industrial and Labor Relations などの state school はスロープの上の方に位置している。そこで、private school は“lower campus” State school は“upper campus” とよば

れるのであるが、この両者のもつ雰囲気は、かなりちがうようである。ひとくちでいえば、lower campus は、「よりアカデミックな」感じがし、upper campus は「よりプラグマティックな」感じがする。また New York State からの莫大な財政援助のおかげで、upper campus は金回りがよく、lower campus は、とくべつのところをのぞき金回りがよくないのだという。だから、「どうしても奨学金をとりたかったら upper campus をねえ」とはよくいわれている。もっとも、最近では、state と private が複雑に入りまじってきているようだから、極度の一般化は危険であろう。

つぎにコーネルの特徴としてあげられるのは、

graduate program と undergraduate program 両方に、相応のウェイトがかけられていることである。最近のアメリカの有名な大学における undergraduate 軽視の風潮は一般的であり、undergraduate の講義は full professor がやらす、graduate assistant がほとんどもつというようなケースさえある、と聞いているが、コーネルは state school をもつためか、undergraduate の教育も相当熱心におこなわれている。日本における graduate program の貧弱さは、目にあまるものがあるが、こちらでは graduate school のよしあしが大学の研究

活動を評価する基準になっているから、大きな大学ではどこでも graduate school は大切にされているようである。コーネルには、いくつかの図書館があるが、その総元締である Olin Library は graduate student のための図書館とされている。コーネルにおいては、undergraduate も大切にとりあつかわれていると述べたが、それはあくまでも教育という見地からで、研究ということになると、undergraduate の学生は、特別な許可がないかぎり、Olin Library の書庫には入れず、その他さまざまな制限が加えられている。コーネルの学生は、毎年約12,000人とされているが、そのうち undergraduate student は約9,000人、graduate student は約3,000人とみなされている。

さらに、もうひとつコーネルの特色をあげておこう。それは、外国人学生がかなり多いということである。他の大学の実情は知らないから、これが特筆すべきことであるかどうかは知らないが、とにかくキャンパスを歩いていると、よくいろいろな人種にあう。これはコーネルが、international なプログラムをたくさん持っているということにも原因しているであろう。外国人学生数は毎年約1,000人、全学生数の約1割にあたり、かれらは、85ヶ国からあつまって来ているとされている。

4. コーネル大学, Southeast Asia Program

コーネルにおけるアジア研究の中心は、Dept. of Asian Studies である。しかし、この学部は、わた

るまでには成熟していないようである。あるいは地域そのものを研究対象とする学問は、アカデミックな分野として独立しにくいのであろうか。ともあれ、Dept. of Asian Studies は、機構としては存在している、実際的な活動は、そのなかにふくまれるさまざまなプログラムによって遂行されているということができよう。

現在、コーネルの Dept. of Asian Studies は、3つの大きなプログラムをもつ。China Program, South Asia Program, Southeast Asia Program である。このうちもっとも active なのは、Professor Kahin を Director とする Southeast Asia Program である。この Program が中心となって刊行するほう大な出版物については改めて述べるまでもないであらう。

この Program は、luncheon meeting と称して、毎月1回研究会をもつ。これは、Cornell Modern Indonesia Project の建物でおこなわれており、この会で、Southeast Asian Program のメンバーが顔を合わせることになる。この会の昨年度の lecture としては、Prof. Sharp の Northern Thailand の field work に関するもの Professor Johns のインドネシア文学および歴史に関するもの、Dr. Daniel S. Lev のインドネシア印象記、Dr. Tugby のインドネシア社会

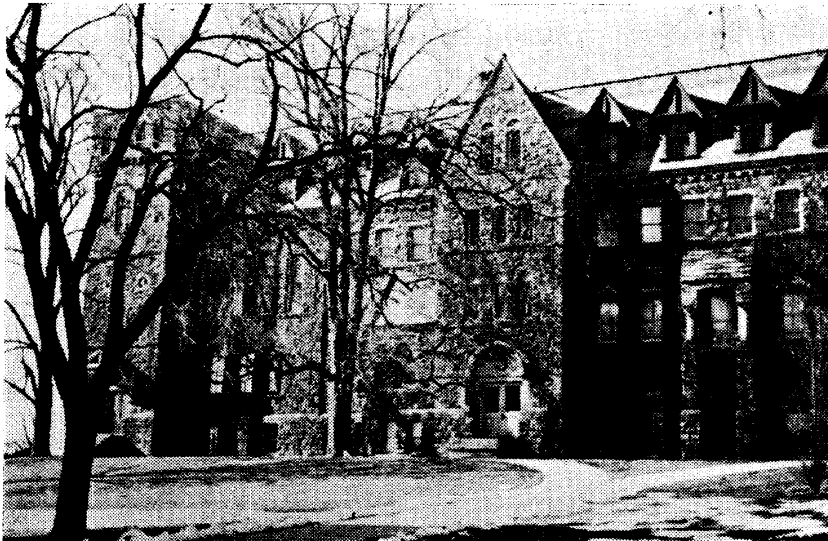


写真2 Dept. of Asian Studies のある Franklin Hall

くしのみたところでは他の学部と、ちょっと様子がちがうようである。たとえば、ph. D コースの学生は、特別な場合を除いては、Asian Studies を major subject としてえらぶことはできない。だから、Dept. of Asian Studies に属する学生は、ほとんどまた他の学部にも所属しているわけである。Dept. of Asian Studies も他の学部と同様、自分の建物をもっている。しかし、Asian Studies の建物に office をもっている professor は非常に少ない。現在、学部長の Professor Smith でも、ほとんどは Dept. of Anthropology の office にいるという具合である。それこれを考え合わせてみると、Asian Studies という学問は、アメリカにおいても、まだ自律性をもち

の socialization に関するもの、Dr. Father Carroll のフィリピン経済発展における危機についてのもの、等々があった。Southeast Asian Program では、各学期に一つずつ東南アジアの特定の国をいろいろな面から検討するセミナーをもっている。1964年の秋学期には、Malaysia が予定されていたが、これは行なわれず、1965年の春学期には、Prof. Sharp が中心となって Thailand についてのセミナーがもたれた。

コーネルの Southeast Asian Study をとりあげるときに欠かすことのできないのは、東南アジア関係のデータの豊富さであろう。東南アジアのみならずアジア関係の書籍、データは Wason Collection として

Olin Library のなかに特別に管理されているが、タイ、マラヤ、インドネシア、フィリピン等、東南アジア諸国に関する蔵書は大変多く、偉容を誇っている。そして、graduate student ならだれでも自由に Collection のなかに入り、利用できるようになっている。Southeast Asia のものに比較すると South Asia, Far East に関する資料はあまり多くなく、また、整理もよくないようである。日本関係の資料などもかなりたくさんあるのだが、未整理のまま、放置されているものが多い。これも、コーネルの Asian Study においては、Southeast Asia が圧倒的に重視されていることを物語る一つの例であろう。Southeast Asia という地域のなかだけでみても、Sharp—Anthropology—Thailand, Kahin—Government—Indonesia, Golay—Economics—Philippine, Echols—Linguistics—Indonesia というラインに沿っての一種の系列化が進んでいるようである。だから、この系列にうまく合うような area と subject をもっていないと、よい指導者、よいデータを得られないということもおこりうる。Southeast Asia 以外では、Skinner—Anthropology—China, Smith—Anthropology—Japan というのが、強力なラインとして考えられるであろう。

Southeast Asian Program は、アカデミックな活動だけでなく、しばしば啓蒙的な催しにも参加する。昨年度は、ヴェトナム問題に関し、有識者をあつめて、ヴェトナム・ウィーク・エンドと称する一連の講習会をもった。また、Prof. Kahin は「ヴェトナムは nationalism の勢力である」という認識のもとに、“teach— in” とよばれる学生の集会などにも出て来て、ジョンソン政策批判の陣頭にたっていた。

よく、東南アジア研究の方法に関して“Cornell System”という言葉が使われる。あたかも、それが非常に完成された統一的方法であるかのように。しかし実体は、いろいろな思想傾向とさまざまな方法をもった学者達の、それこそ非統一的な集まりのようにみ

える。そして、一見統一的な機構をもちながら、その内部で、ひとりひとりの学者の個性と理念と方法がぶつかり合っているというのが Cornell Asian Studies の現在のすがたではないかと考えている。

5. コーネル大学, International Agricultural Development Program

前項の Southeast Asia Program は、コーネル全体のプログラムである。もっとも、Anthropology, Linguistics, Government などが重視されているから、lower campus が中心となったプログラムとみることができよう。これに対して、upper campus の一つの代表である College of Agriculture が中心となって組織している海外研究の中に、この International Agricultural Development のプログラムがある。これには、Agricultural Economics, Agronomy, Agricultural Engineering, Entomology, Nutrition, Pomology, Rural Education, Rural Sociology, Vegetable Crops などの学部が参加し、東南アジアのみならず、ラテン・アメリカ、アフリカなどをふくむ、いわゆる低所得国全体についての研究計画を進行させている。財源は主として、New York State からである。わたくしの属している Dept. of Agricultural Economics でこのプログラムに関係あるコースを列記しておこう。

1. Economics of Agricultural Development.

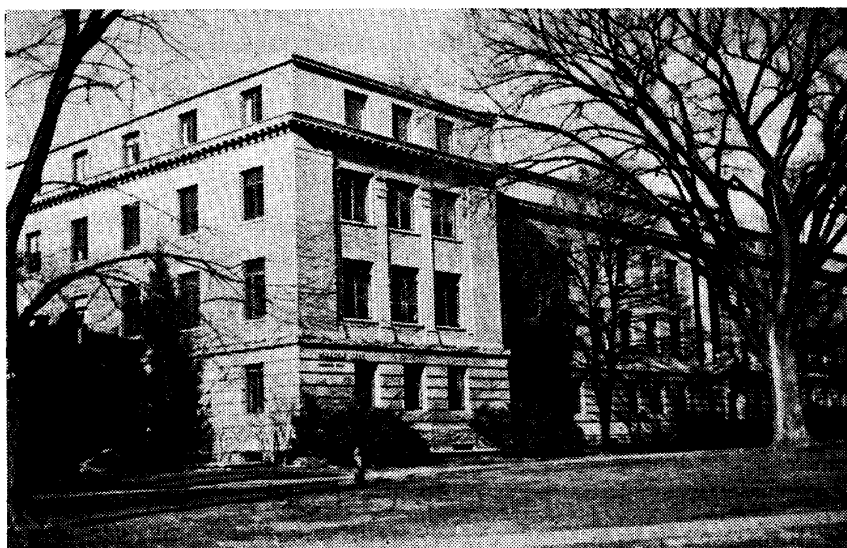


写真3 Dept. of Agricultural Economics
のある Warren Hall

2. Farm Organization in the United States
(for foreign students only)

3. Seminar on Comparative Rural Government

4. Seminar on the Economics of Agricultural Development

5. Seminar on Latin American Agricultural Policy

6. Seminar on Economics of Tropical Agriculture

1. にはわたくしも出席したが、若手のホープとみなされている Assistant Professor Mellor の熱心な講義が好評だった。その他、Dept. of Agricultural Economics からの Assistant Professor Poleman, Assistant Professor Luykx などの若手により、プログラムは推進されているようである。なお、Dept. of Agricultural Economics は Ford Foundation からの grant を得て、来年度から、Low Income Region に関する独自のプログラムをもつことになっている。

6. あとがき

アメリカの graduate students は、一般によく勉強する。ひとつには、よく勉強していい成績をとらないと勉強をつづけられなくなるからである。fellowship, scholarship, assistantship などは、ほとんど成績に準拠して決定される。だから ph. D コースの学生は、平均点85点以上とるために、マスター・コースの学生は平均点 80 点以上とるために、夢中になって勉強する。あまり、成績が悪いと放校される。この場合、徴兵制度のもたらす心理的影響も大きい。Graduate School の fellowship は、平均点90点以上あってもなかなかもらえないのだそうである。このため、学生達は、しばしば自分の興味のあるコースと

いうより、点をとりやすいコースをとることとなる。この傾向は、アメリカへ来たばかりのわたくしには大変奇妙なものに映った。これはアメリカの大学院制度のもつひとつの欠陥なのであろうが、学生達は適当に自分に興味のあるコースと点のとり易いコースを組み合わせさせてやっている。わたくしも第二学期目にはこの手を用い、成功した。

かれらは勉強するわりにはまたよくあそぶ。ウィークエンドはほとんど勉強せず、自動車を走らせてどこかへ消えてしまう。勉強の時間とレクリエーションの時間をたいへんはっきりと区別している。とくに undergraduate の学生に、この傾向は強いようである。比較的政治に関心がないと考えられているアメリカの学生も、ヴェトナム問題では、かなりエキサイトし、コーネルでも、しばしば講演会、すわりこみ、デモ行進等があった。もっとも話題を呼んだのは、軍事教練を受けた学生達の総長閲見式に、ヴェトナム戦争反対の学生達がすわりこみをかけた事件だった。わたくしの研究室にも一人ヴェトナム問題に大変熱心なアメリカ人学生がいて、よく議論をたたかわせていた。かれは自分達の前の世代を、“silent generation”と呼び、自分達の世代がこれからのアメリカをうごかしていくのだと熱心に説いていた。コーネルだけでなく、こうした“angry generation”の活動は現在のアメリカにおける一つの風潮であるらしい。もっともヴェトナム問題に関する知識人・学生の声は、ジョンソンの強力な政治力によって、黙殺されつづけているようであるが。

一年という月日は、またたく間にすぎた。わたくしは、来年度もコーネルで勉強をつづける予定でいる。アメリカという、とにかく巨大な混とんのなかで、最大限のものを吸収しながらも、自分を失なわず、着実に歩いて行きたいものだ。

——1965年 8 月——

マラヤの Aborigines

前 田 成 文

1 マラヤにおける原住民の位置づけ

マラヤにおいて、いわゆる原住民が政府の注意をひきだしたのは、1948年から10余年続いた共産党員のゲリラ戦以来のことで、それ以前は僅かにペラ州に原住民保護の機関があっただけであった（そのせいかタイピンにある博物館の原住民——主にネグリト系、セマン系——のコレクションは素晴らしい）。コミュニス



写真1 川を渡る Mohammad 氏

トがジャングルに入りそこを拠点として活動するので、政府はジャングルやその周辺に住む住民を強制的に移住させて、完全に監視のできる新しい村を作ったわけである。ジャングルに住んでいた原住民も大方は何らかの形で Re-settled されて、政府の援助、保護を受けることができるようになったわけである。（今

年の6月、サラワクでも Kuching-Serian Road の約8,000人の中国人が強制移動させられ、彼らの福利に関して以前の生活より良くなったのか悪くなったのかが、論議されている。）

現在のマラヤにおける Welfare of the Aborigines は Federal list の中に入っており、実際には Federal の Ministry of Land and Mines の下の Aborigines Department が一切を処理していて、マラヤの各州に連邦政府役人が配置されている。但しこれはマレー半島のみで、東マレーシア（ボルネオ地域）では、すべての先住民を Native People と称して、マラヤにおけるマレー人の場合のように、彼らの生活慣習・慣習法などの取扱いは各州に任されている（Supplement to State List for Borneo States）。尚、マレーシア成立後の統計では、マレー人をも含めた先住民全体という意味で Indigineous People という語を用いるようになった。

マレー語では Aborigines というのを Orang Asli といい、Aborigines Dept. も Jabatan Orang Asli と公称されている。Asli というのは真性のとか、本来のという意味の語である。マレー人は、この Orang Asli を Jakun, Semang, Sakai などという風に区別して呼ぶが一般にそれらの語は程度の低い民を指す蔑称と受けとられ、原住民自身は直接そう呼びかけられることを好まないと聞く。しかし従来からこの3つの語を用いてマレー半島の原住民を3分することが行われているが、必ずしもその呼称の仕方が一定しているというわけではなく学者によって異なるようである。この3人種は普通、ネグリト系（セマン族）、ヴェッドイド系（サカイ族）、プロト・マレー人（モンゴロイド）系の3つであると言われる。しかし混血の度合は大きいようで異論のないわけではない。Jabatan Orang Asli では、これらの Orang Asli を20名のグループに区別して扱っている。主として言語の相違によると聞く。（北から、Kensien, Kintak, Lanoh, Jahai, Menriq, Temiar, Semai, Bateq, Semoq Beri, Jahhut, Chewong, Temoq, Semelai, Temuan, Belandas, Mah Meri, Jakun, Orang Kanaq, Orang Laut (or Orang Kuala), Orang Seletar）

1947年と1957年とのセンサスでは、原住民の数は次のようになっている。（1957 Census Report NO. 14）

表1 原住民センサス

分類 \ 年	1947	1957
Negrito	2931	841
Jakun	7429	4213
Semai	7227	12451
Semelai	1165	2821
Temiar	6710	9408
Other	9255	11626
Total	34717	41360

2 原住民調査の手掛りを求めて

これらの内北部に住む原住民の調査はかなり行なわれてはいるが、南部に住む原住民は比較的等閑視され、私の知る限りでは学術的なレポートはないようである。マレー人のコミュニティを理解するのに、このプロト・マレー人と呼ばれる人種の社会を理解する必要が痛感され、とくに一般に双系的といわれる彼らの親構造といか族組織が実際にいかに働いて、全体の社会に結びついているかが問題となる。Orang Asli の村を選択した理由は、彼らの社会構造の記述的なデータを得ることと同時に、彼らとマレー人あるいは他の地域（ボルネオ・スマトラ）のプロト・マレー人との間に continuity あるいは discontinuity 見を見つけ出したいからであった。

Jabatan Orang Asli の Commissioner, Iskandar Yusoff Carey 博士(人類学)の紹介により、ジョホール・バルの Assistant Professor, Mohd Shariff b. Mahd Noor 氏に会い、そこから目的地エンダウ川流域担当の Penolong Orang Asli, Mohamad b. Tohid 氏の協力を得て、最初の部落訪問をした。(地図参照。尚、Atlas of Southeast Asia の P. 20 の Endai は誤りで、従って、Index にも Endai が記されているが、両者とも *Endau* に訂正されるべきである。)

エンダウ川はパハン州とジョホール州との境界の一部にもなっていて、川口には Padang Endau という小さな町がある。(エンダウ区の人口、5,600人、エンダウの

町のみ、2,675人、1957 Census) 少し前迄はこのエンダウ川の支流 Sungai Sembrong に日本の鉱山があったそうだし、またエンダウの北の Rompin では鉄鉱山が今でもあるということである。このエンダウ川の源流は、3,398 フィートの高さの Gunung Besar から流れて多くの支流をあわせて東海岸に出てくる。この G. Besar の西側にも、Labis の近くにジャクンの部落があるという。Jabatan Orang Asli で Jakun と呼ぶのは、パハン州南部の一部、ジョホール、マラッカ、スグリ・スンピランに住んでいる Prot-Malaya の1グループを指す。エンダウ川流域には約8つ程のジャクンの部落が川沿いにある。その内ジョホール州側には5つの部落があり、今度の調査の対象となるのはこの5つの部落が中心である。

部落といっても、小は8戸、大は31戸の小さな集落で、すべてあわせても100戸という位であるから、調査には好都合の所である。

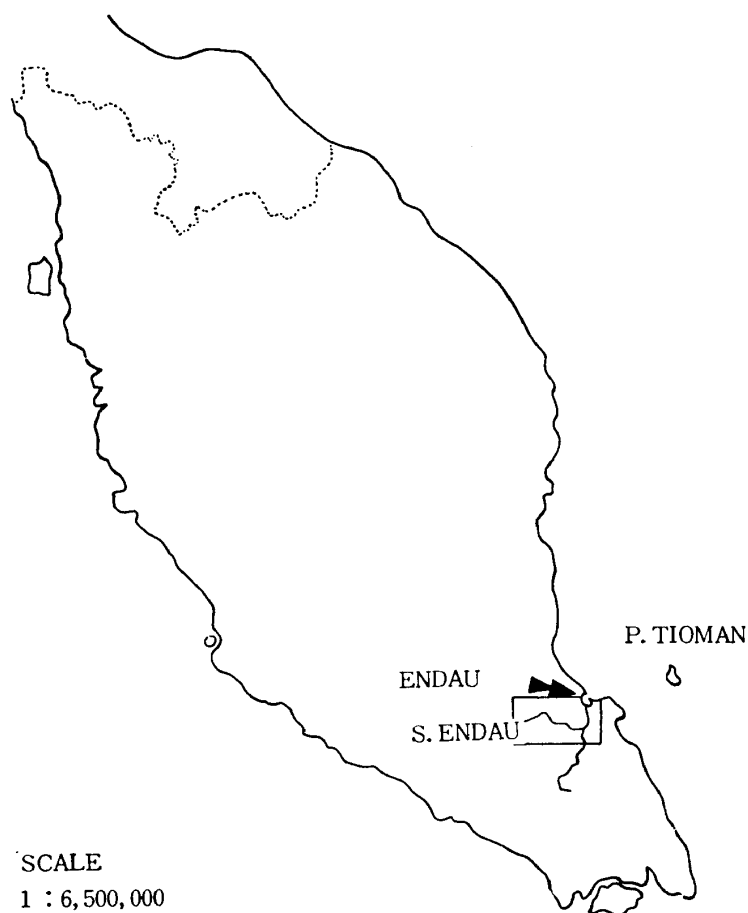


図1 エンダウの所在

表2 5つの部落の戸数と人口

部落名	戸数	人口		計
		男	女	
Labong	31	79	75	154
Jorak	30	75	61	131
Tg Tuan	14			62
Punan	8			50
Peta	17			85

Mohammad 氏調べ 1965-5-15現在

3 各部落歴訪

まず Padang Endau からモーターボートで2.30分行った所に Sungei Labong という支流が左手に流れていて、その川沿いに Labong 部落がある。部落長 (Batin) の Sela は4~50才位であろうか。シレで口をまっ赤にしている。ここにはすでに学校が立っており、今年は政府の援助でドリアン(榴莲)の木の栽培を始めるという。この部落には水路の外に陸路でも来ることができる。交通の便などから考えても一番町との接触が多い。Mohammad 氏に言わせると、上流の部落に比べてやや怠惰だとのこと。

この部落から上流に溯ること約1時間程で、左岸に点々と小屋が見え出す。Jorak 部落である。船着場を

こしらえてあるのは、この部落だけである。Rotan が川沿いに一杯干してある。ちょうどこの部落の Batin が町に Rotan を売りに行き行って不在であったので、ここには長く滞在しなかった。しかし町からの遠

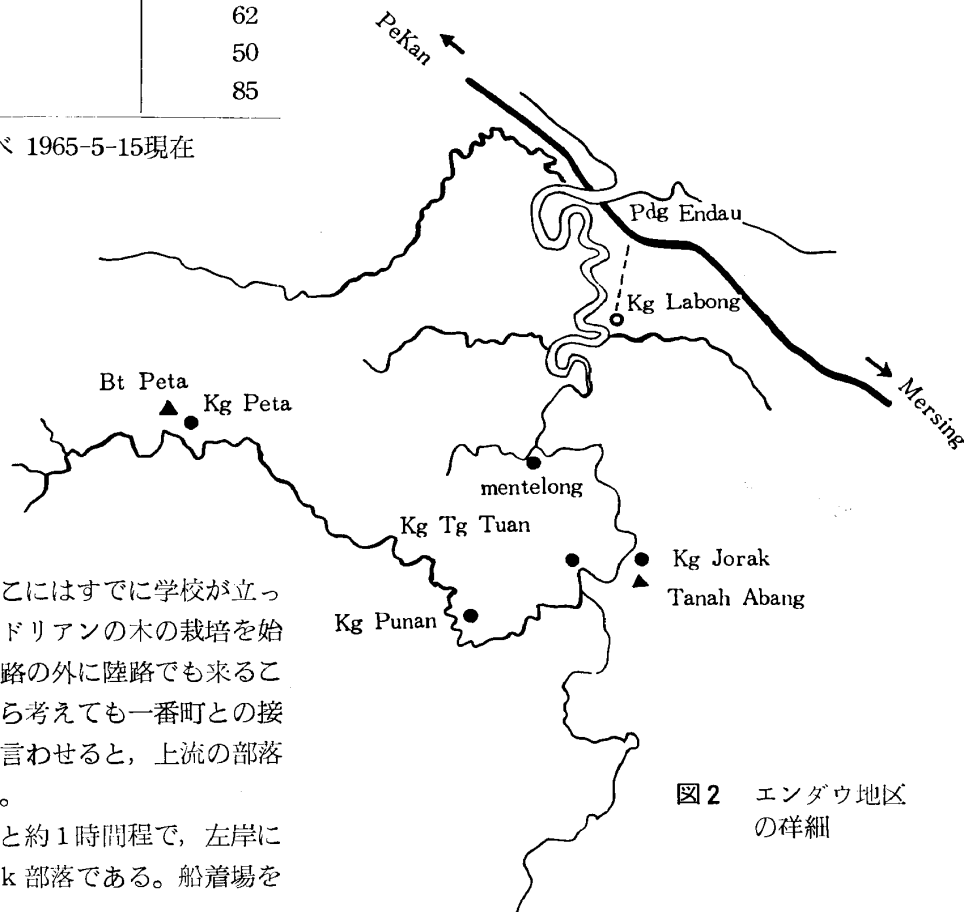


図2 エンダウ地区の詳細

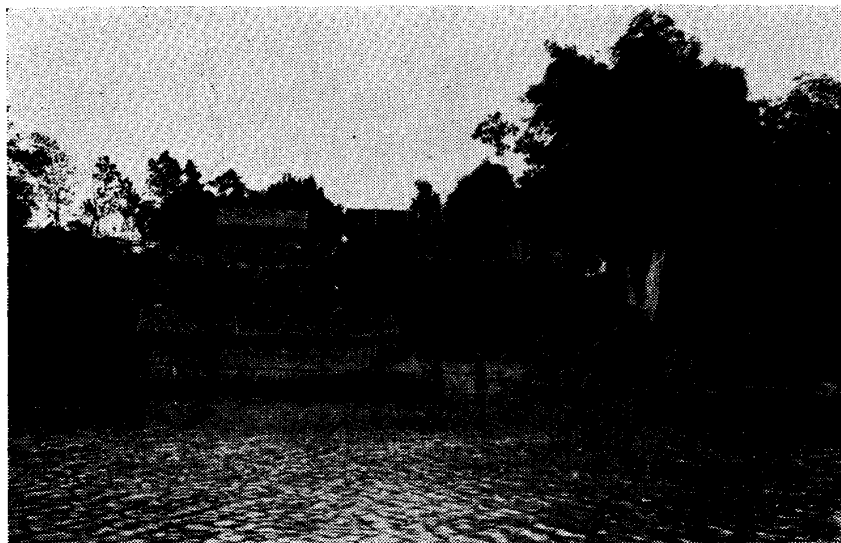


写真2 部落の家々

さ、上流の村への近さ、洪水の心配がない小高い所に位置していること、他の部落より明るい清潔な感じを受けたこと、Shariff 氏も Mohammad 氏もここを推せんしてくれたことなどから、まず最初の根拠地はここに置くことに決定した。

Jorak 部落から更に1~2時間——モーターボートのスピードによるが、政府のこのモーターボートは7年前のもので故障につぐ故障で2時間もかかった——したところに、Punan 部落という8軒からなる小部落があり、Mohammad 氏と私とは一夜をこの Batin の家で過す

ことになった。

Labong 部落を除いて井戸を掘っている部落はないので、そおっと川のなるべくまん中の方について水を汲み、それを持参のヒーターで沸かして、お茶を作る。Batin 氏が家から持ってきたマレーの菓子も出る。日も暮れると、ランプをともし、再び Mohammad 氏は川にでて晩飯を用意する。カンヅメなど持参したが、彼が家からもってきたカレーで十分だった。彼は、この職につく前（すでに10年余りたつ）には、ジャングルのコミュニスト狩りの兵隊だったそうで、足をうたれてびっこになって以来現在の職にはげんでいる。コミュニストと中国人とは彼の嫌悪の的である。非常に勤勉でしかも明るい人柄で、部落の人と膝をつきあわせて困ったこと、問題になること等を聞いてやり、良き相談相手になって、部落の人の人気も上々というところである。この夜も遅くまで、どこまでがこの Batin の土地かということ話を話していた。

日が暮れると同時に、Batin 夫妻とその娘だけだとばかり思っていたこの小さな小屋に、ジャングルに行き仕事をしてきた若者達が帰ってきて、ついには8畳位の部屋に13人にもなった。みんなゴロ寝でその側に Mohammad 氏と私も寝ることになる。ただ Batin 夫妻だけは、片隅のカヤらしきものの中に入ってしまった。

朝は日があけるかあけない内に起き、コーヒーを飲んで腹をふくらせると、みんなジャングルの中へと消えていく。Batin の奥さんは起きるなり、採集かごを背負ってジャングルへ行ってきて、何か取って帰ってきた。小さい子供は、ぶよぶよの卵を川から取ってきた。Mohammad 氏は3ドル程だして、その24個の大きな卵全部を買いとる。

4 各部落の内情

この Punan から上流は、今水が少なく、また流木が多くて、モーターボートでは到底行かれないということなので、Peta 部落へ行くのは別の機会に譲った。全体としてこの Endau 川は非常に浅くて船の航

行には適していないようである。

Punan, Peta 両部落とも、下流の村から分離してきたもので、Punan 部落は3年目、Peta 部落は1年目だということである。コミュニスト対策としての Emergency 以前は、相当数の Jakun がこの Endau 川流域に居住し、現在よりもずっと人口が多かった。しかし、Emergency の時の Re-Settlement ですべて、海岸部の Sungai Endau Kechil に移住させられ、そこでかなりの人口の減少をみた後、一部の Jakun は政府に Endau 川流域に帰ることを願い出、Labong や Tarak, Mentelong 部落が再び形成されることになった。その後、経済的に生活が苦しくなったなどの理由で、Peta, Punan のように上流の方へと分立していった。方々にすでに人のいなくなった荒

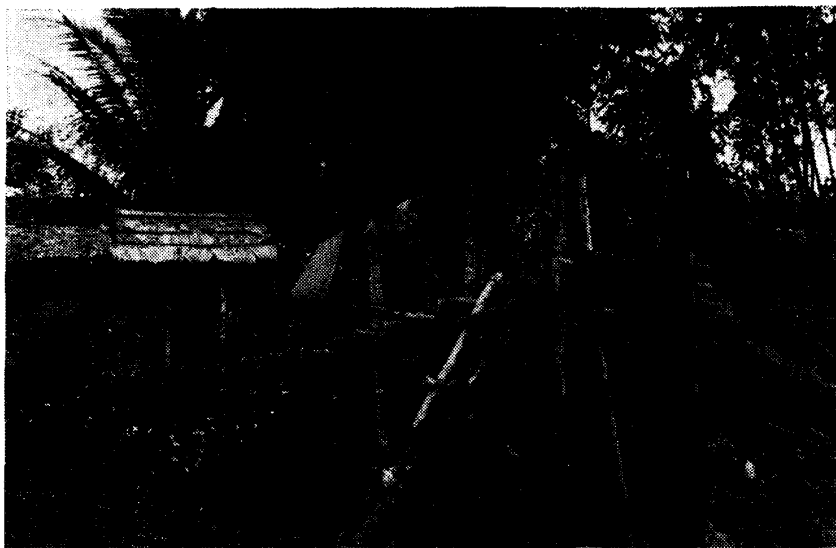


写真3 Jorak 部落の船着場

れはてた小屋が見られるのも、彼らが生活のし易い所を求めて動いていることを示している。

各部落はすべて縁者であるというが、実際にはどのような関係のものが集まり、どのようにして Peta, Punan 部落のように分立していくのか。その原因は。

一戸あたりの平均人員は4.83人とマレー人より高い率を示すが何故か。貧困の故か、伝統の故か。

男女の比率をみると、女性の方が常に低いがこれは何故か。彼らは絶滅しつつあるのか。

彼らは自分達の宗教に執着して、イスラムには改宗しようとはしていない。(Endau Kechil に住む若干の原住民はイスラムに改宗しているが、彼らの信仰は

本当のものではないと、Batin Ali は強調していた。) 従ってもっとも近い筈のマレー人コミュニティにも吸収され難く、政府の援助は受けているもののどのコミュニティからも孤立している。

ただ面白いと思ったのは、Labong と Tarak の二部落に各々2人ずつの中国人が原住民の女性と結婚して定着していることである。Mohammad 氏の説明によれば、中国人同志の結婚には婚資が非常に高くつく

ので、婚資の安いジャクンの女と結婚したのだそうだ。

外部から部落にくるのは、月に2、3度くる医者 of 回診、担当官の巡回、中国人、インド人などの鉱山を求めてくる山師などで、反対に部落から町へ出ていくのは、Batin のような人でも月に1回位、品物を求めに行く位である。ラジオ、時計、写真などを持っている反面、生活そのものは山芋を中心とする畑仕事と援集経済とに依存し、その住む小屋は、マレー人のもっとも貧困な家に匹敵するのみである。



写真4 夜なべ仕事にむしろを編む親娘。